明石の君と歌人伊勢

森野正弘

一．問題の所在

本論で考察の対象とするのは『源氏物語』の登場人物である明石の君。彼女は、光源氏が都を離れて明石の地へと赴いた際に出会った女性で、やがて光源氏の子どもを身ごもり、当地で出産。その後、出生した子（姫君）と共に光源氏のいる都へやってくるというプロセスを踏む。今回、問題の所在とするのは、その光源氏と明石の君が初めて対面する場面である。

近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさぐりけるほど見えてをかしければ、（源氏）「この聞きならしたる琴をさへや」などよろづにのたまふ。

（源氏）むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと

（明石）明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心もなくうちとけてゐたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の内に入りて、いかで固めけるにかいと強きを、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。されど、さのみもいかでかあらむ。人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞしたる。

（明石②二五七～八頁）[注1]

八月十二、三日の月夜の頃、光源氏は明石入道に促されて、その娘明石の君の暮らす岡辺の宿を訪れた。明石の君の部屋には箏の琴があり、几帳の紐が風に揺れて琴の絃に触れるたびに音を立てている。かねて入道より、彼女の箏の琴の奏法が由緒あるものであることを聞いていた光源氏は、その演奏を聞かせてほしい旨申し入れ、「むつごとを…」という歌を詠む。「琴ならぬ睦言を交わし合える人がほしい、そうすれば憂き世をさまよう夢も半ば覚めようか」と。それに対し、明石の君は「明けぬ夜に…」という歌を詠み、自分には夢を覚ます力などないと切り返す。その明石の君の様子を物語は、光源氏の所感に絡めて「伊勢の御息所」によく似ていると語ってゆく。いったい、明石の君に似ているという「伊勢の御息所」とは誰のことか。試みに諸注を紐解いてみると、いずれも六条御息所を指すという解釈で一致していた。

・孟津抄　…哥もよく侍れは御息所に似たると源心也

・岷江入楚　…けたかきさま也心ふかきさまもさるへき也
・玉上評釈　…いま伊勢にいる御息所は、大臣の姫であり、桐壺帝の弟君である前坊の御息所になった人である。（略）身体つき、動作、声の出し具合、そしておしらく性格まで似ている、と作者はいいたいのかもしれない。
・新潮古典集成　…伊勢に下向した六条の御息所。
・岩波新大系　…六条御息所。
・小学館新編全集…六条御息所。「心にくくよしあり」と評判が高かった。
・鑑賞と基礎知識…六条御息所。斎宮となった娘と共に伊勢に下っている。「心にくくよしある人」として評判の高かった貴婦人。

『孟津抄』（九条稙通、一五七五年）は歌の詠みぶりという点に、『岷江入楚』（中院通勝、一五九八年）や小学館新編全集、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂、二〇〇〇年）などは気品や風情という点に、そして玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店、一九六五年）は身体つきに性格をも含め、それぞれ明石の君と六条御息所の類似性を読み取っている。ちなみに、このとき六条御息所は、斎宮に卜定された娘に付き添って伊勢へ下向していた。そのような六条御息所を明石の君に結び付けてゆく物語の論理とは、いったいどのようなものであるのか。この件に関して最初に注目したのは坂本和子であった。坂本は、明石の君の父方の祖父大臣と六条御息所の父大臣との間に血縁関係を想定する説を唱えたのである。[注2] この坂本説はその後、藤井貞和によって支持されてゆく。[注3] 一方、血縁ではなく、役割上の系譜という観点で両者を捉えたのが小沢恵右である。小沢は、明石の君母子と六条御息所母子がそれぞれ住吉の神と伊勢の神の加護を受ける存在であるという対偶を読み取り、いずれも娘を通して光源氏の政治的権力を支えているとして、六条御息所―明石の君という類似の系譜の持つ意味を説いた。[注4] この系譜という観点は久富木原玲によっても採用され、久富木原は更に、明石の君が桐壺更衣の血縁にあたる点をも加味して、桐壺更衣―六条御息所―明石の君という三者を「御息所のゆかり」として捉えている。[注5] また、これら諸説に対し、類似する両者の関係を血縁、系譜、「ゆかり」などのいずれかに帰結させて解釈するのではなく、むしろそういったさまざまな関係性を誘発する仕組みにこそ注意を払うべきだという安藤徹の意見もある。[注6]

そもそも明石の君と六条御息所の類似を、何らかの意味ある関係として捉え直すべきなのであろうか。こういった疑問を投げかけているのが鎌田清栄である。鎌田は、明石の君も六条御息所も共に琴と松風を組み合わせた場面を有している点に着目し、それらの場面が斎宮女御（徽子女王）の詠による「琴の音に峰の松風かよふらし（なり）いづれのをより調べそめけむ」歌を下敷きにして作られていると指摘する。そして、それぞれの場面の間には繋がりがあるわけではなく、「琴の音に」歌の情趣が選び取られただけであるとし、明石の君が「伊勢の御息所」に似ているというのも、「明石女像を六条御息所に似せて作ろうとしているのではなく、場面設定にかかわりのある斎宮女御から六条御息所を思い出して、明石女の誉め言葉にしたのではないか」と説く。[注7] 確かに、明石の君と六条御息所の類似を明言しているのは当該箇所のみであり、しかもその叙述は光

源氏の所感であると同時に語り手のコメントでもあった。[注8] 研究史において、鎌田の説は作中人物間の連繋を切断するものであるがゆえに少数派を余儀なくされているが、実は本論の立場は鎌田と極めて近い所にある。結論を先取りして言えば、鎌田が「伊勢の御息所」を斎宮女御と解するのに対し、本論ではそれを歌人伊勢と解することになる。

二、歌ことばとしての「明けぬ夜」

まずは研究史の顰に倣い、「伊勢の御息所」という呼称の実態調査から始めたい。次に掲げるのは物語における六条御息所の呼称の一覧である。[注9]

[巻名]	(呼称)
夕顔	(六条わたり、女)
若紫	(六条京極わたり)
末摘花	(六条わたり)
葵	(六条御息所、女、斎宮の御母御息所、御息所)
賢木	(御息所、女君、女)
須磨	(伊勢宮、御息所)
明石	(伊勢御息所)
澪標	(御息所、女、故御息所、母御息所)
絵合	(故御息所)
薄雲	(はかなう消えたまひにし露)
梅枝	(中宮の母御息所)
藤裏葉	(中宮の御母御息所)
若菜上	(母御息所、伊勢御息所)
若菜下	(中宮の御母御息所)
柏木	(御物の怪)
鈴虫	(御息所、亡き人)

物語中、「伊勢の御息所」の用例は二例で、問題の所在とした明石巻の箇所と若菜上巻での表出となる。若菜上巻の用例は、その時点で「六条」という場所が光源氏の邸宅となっていることから、「六条」の呼称を用いずに「伊勢」の呼称を用いたものと思われる。そうすると、御息所が「伊勢」と呼称されるのは、原則として彼女が伊勢へ下向している期間とも言えそうである。その期間中、御息所が物語に語られてくるのは須磨巻の一箇所だけで、須磨にいる光源氏と手紙を交わす条である。通説に従えば、問題の所在とした明石の君は、その条における御息所と似通うということになろうか。ここで実際に、須磨巻に語られてくる六条御息所の様子について確認してみることにしよう。

まことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへたづね参れり。浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしくいたり深う見えたり。(六条御息所)「なお現とは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなん。さりとも年月は隔てたまはじと思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになりはつべきにか」と多かり。（須磨②一九三～四頁）

須磨での暮らしが落ち着きを見せ始めた頃、光源氏は京にいる紫の上をはじめとして、方々の女君たちに手紙を送った。伊勢へ下向中の六条御息所にも使者が遣わされ、その返信が届けられることになる。御息所の手紙には、光源氏が須磨で暮らしていることを現実の出来事として受け止められぬという思いや、まるで闇の中を彷徨う思いであろう光源氏の心中を忖度する文面が綴られていた。注目したいのは、その文面で用いられた「明けぬ夜の心まどひ」という表現である。これは、先に問題の所在として掲げた明石の君の歌に見られる「明けぬ夜」「まどへる心」という表現と照応するものにほかならない。つまり、明石の君と六条御息所が似ているというのは、人柄などの造型というよりも、より直接的には彼女たちの用いた「明けぬ夜」という表現の一致について述べたものである可能性が高いのである。この表現の一致については既に、宗雪修三[注10]や竹内正彦[注11]によって指摘されているところであるが、両者ともこれを明石の君と六条御息所の造型の相似を論じる文脈へと回収しており、従来説の枠組みに止まっていると言ってよい。本論で注目したいのは、この「明けぬ夜」という表現が、更に作品の外側へと典拠を求め得る点である。『源氏物語引歌索引』[注12]によれば、ここには次のような引歌が指摘されている。

①あふことのあけぬ夜ながら明けぬれば我こそ帰れ心やはゆく

（伊勢集、一八一五四・新古今集巻十三、恋三、一一六八、題しらず　伊勢）〔花屋抄〕

②明けぬ夜の心地ながらにやみにしを朝倉といひし声はきゝきや

（後拾遺集巻十八、雑四、一〇八二、実方の朝臣女の許にまうで来て格子をならし侍りけるに女の心しらぬ人してあらくましげに問はせて侍ければ帰り侍りにけり、つとめて女の遣しける読人しらず）〔異本紫明抄〕

このうち、詠出時期として先行するのは『花屋抄』（一五九五年）の指摘する①の歌である。[注13]これは、平安期の歌人伊勢が、屏風絵の中の人物になり代わって詠んだ歌で、西本願寺本『伊勢集』では五一番歌として収録されている。ただし、第二句の本文には異同があり、群書類聚本・歌仙家集本・『新古今集』（一一六八番歌）は「あけぬ夜」であるが、西本願寺本では「あはぬ夜」となる。この点について参考になるのが、『伊勢集』の三五九番歌である。

・（三五九番）　人のあけぬ夜ふかくといふだいを
年のうちにあひてもあはず嘆きけむ人のうへこそ
わがみなりけれ[注14]

これは、ある男が伊勢に贈った歌で、詞書によれば「あけぬ夜ふかく」という題で詠まれたものらしい。この題の典拠について、歌中の「あひてもあはず」という状況などから、『伊勢集』五一番歌を踏まえたものではないかという説が提出されている。[注15]もしそうであれば、五一番歌の第二句は「明けぬ夜」として流通していた可能性が高い。そしてそれは、当時の男性たちによって伊勢と結びつく語彙として用いられていたということにもなる。ここで顧みられて

くるのが、先に掲げた須磨巻の場面に見られる六条御息所の歌である。御息所は、「須磨の浦で、伊勢にいる私のことを思いやれ」と、自らを「伊勢の海人」として象っていた。これは御息所の現在地である伊勢を響かせたものであるが、「伊勢の海人」を自称する在り方もまた、伊勢の歌に散見されるものである。

・（二一九番）伊勢の海に年経て住みしあまなればいづれの藻かはかづきのこせる

・（四六二番）沖つ波　荒れのみまさる　宮の内に　年経て住みし　伊勢のあまも…

須磨巻における六条御息所の手紙は、恐らくは地名としての伊勢からの連想により、歌人伊勢にまつわる歌ことばを織り込むものとなったのではないだろうか。そうであれば、「明けぬ夜」という表現の典拠も、②の『異本紫明抄』説よりは、①の『花屋抄』説の方が適当であるように思える。そして、その御息所の手紙に引用されたのと同じく「明けぬ夜」という表現を含み持つものとして、明石巻における明石の君の歌があるということになる。

三．琴の貸借というモチーフ

ここで、伊勢という歌人の足跡を論考に関わる範囲で確認しておきたい。[注16] 伊勢とは、宇多天皇の女御藤原温子のもとに出仕した女性のことで、その当時彼女の父藤原継蔭が伊勢守であったところから付いた女房名である。伊勢はやがて、宇多天皇の寵愛を受けるようになり、男皇子を生む。寛平九年（八九七）、宇多天皇が退位し、温子も内裏を去ったが、伊勢は引き続き温子に仕え、延喜七年（九〇七）に温子が崩御するまで侍女として付き従った。その後、宇多天皇の第四皇子敦慶親王との交際が始まり、女子を儲ける。ちなみにこの女子も長じて歌人となり、父敦慶親王の官職名から中務と呼ばれた。

・貞観十七年（875）…誕生。父は藤原継蔭（仁和二年〈886〉～寛平二年〈890〉に伊勢守就任）。
・仁和四年（888）……宇多天皇の女御藤原温子のもとに出仕する。
・寛平八年（896）……伊勢、宇多天皇の寵愛を受け、やがて男皇子を生む。
・寛平九年（897）……宇多天皇退位。
・延喜七年（907）……温子崩御。
・延喜十年（910）……敦慶親王（＝宇多天皇第四皇子）と交際を始め、やがて女子（＝中務）を生む。

さて、このような人生を歩む伊勢であるが、その足跡の多くは彼女にまつわる歌を通じて辿られるものである。では、その伊勢の歌を取材源としてある人物が形象されるとした場合、果たしてその人物像は伊勢の影をどのように揺曳することになるのか。このような観想をめぐらすのも、実は、物語における明石の君の描かれ方を追っていくと、その要所要所で伊勢の歌が引用されていることに気づかされてくるからである。例えば次に掲げる明石巻の一節を見てみよう。これは、明石を去ることになった光源氏が、明石の君に形見として琴を渡すという場面である。

この（光源氏が）常にゆかしがりたまふ物の音など（明石の君が）さらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。（光源氏）「さらば、形見にも忍ぶばかりの一ことをだに」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかに掻き鳴らしたまへる、深き夜の澄めるはたとへん方なし。入道（＝明石入道）、えたへで箏の琴取りて（明石の君のもとへ）さし入れたり。（明石の君）みづからもいとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきにさそはるるなるべし。忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。…（略）…月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむと（光源氏は）悔しう思さる。心の限り行く先の契りをのみしたまふ。（光源氏）「琴はまた掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、

（明石の君）なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけてしのばん

言ふともなき口ずさびを恨みたまひて、

（光源氏）「逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変らざらなむ

この音違はぬさきにかならずあひ見む」と頼めたまふめり。

（明石②二六五～七頁）

朱雀帝から赦免の宣旨が下され、光源氏は都へ召還されることになった。帰京するにあたり、光源氏は明石の君のもとを訪れ、一度聞きたいと思っていた琴の演奏を彼女に望む。まずは光源氏が、京から持参した琴をわずかに掻き鳴らした。同席していた明石入道は感に堪えず、箏の琴を娘のいる御簾の内へと差し入れる。明石の君も気持ちをそそられ、促されるままに箏の琴を奏でた。その音色を耳にした光源氏は、これまで演奏を聞かずじまいだったことを悔やみつつ、将来の再会を明石の君に約束する。そして、その再会するまでの形見として自分の琴を手渡した。この、琴を再会するまでの形見として捉えるという発想が、『伊勢集』一七八番歌にも見られるのである。

琴かりたる人に

・（一七八番）逢ふことのかたみの声の高からばわが泣く音ともひとは聞かなむ

これは、伊勢がある人から琴を借りていて、その琴を返却する際に詠み添えた歌となる。歌意は、「形見」の琴の音が高く響いたら、それは再会することの「難み（かた）」（難しさ）に泣く私の声と聞いてほしい、となろうか。琴の持ち主が誰であったかは不明だが、詠歌内容から推して恋人に擬し得る異性であることは間違いない。ここで、この伊勢の歌と光源氏が明石の君に贈った歌とを見比べてみたい。

伊勢の歌　＝逢ふことのかたみの声の高からばわが泣く音とも人は聞かなむ

光源氏の歌＝逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変らざらなむ

両歌とも、琴を「形見」として捉えており、同じモチーフが採用

されていると言えるが、そればかりでなく、表現面でも、伊勢の歌の「逢ふことのかたみ」という冒頭に対して、光源氏の歌でも「逢ふまでのかたみ」とあったり、また、句末に願望の終助詞「なむ」を置いていたりなど、構成上の一致をも見ることができる。

ここで、光源氏から明石の君に渡された形見の琴が、物語ではどうなるかを見てみよう。

（光源氏が）ありし夜のこと思し出でらるるをり過ぐさず、（明石の君は）かの琴の御琴さし出でたり。（光源氏は）そこはかとなくものあはれなるに、え忍びたまはで掻き鳴らしたまふ。まだ調べも変らず、ひき返しそのをり今の心地したまふ。

（光源氏）契りしに変らぬことのしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや

女、

（明石の君）変らじと契りしことをたのみにて松のひびきに音をそへしかな

と聞こえかはしたるも似げなからぬこそは、身に余りたるありさまなめれ。（松風②四一四頁）

これは、光源氏が大堰の山荘で明石の君と再会し、形見の琴を演奏するという場面である。光源氏の姫君を生んだ明石の君は、明石の地を離れ、京の郊外にある大堰の山荘に移住してきた。光源氏はそこを訪れ、再会を果たす。その大堰での逗留中、明石の君が差し出してきたのは、かつて光源氏から形見として手渡された琴であった。琴の絃の調子は明石で離別した時と変わっておらず、その音色によって当時のことが思い起こされ、二人は琴をめぐる歌の贈答を交わす。光源氏は、琴の調べが変わっていないことで、再会を約束した自分の気持ちに偽りが無かったことを分ってほしいと訴える。それに対して明石の君は、愛情が変わることはないと約束し、渡してくれた光源氏の言葉と琴とを頼みにして、琴の響きに泣く音を添えて再会する日を心待ちにしていたと返す。光源氏と明石の君との間で、借りた琴を返すというやりとりを題材として歌の贈答が行われたわけである。

ここで再び『伊勢集』を紐解いてみたい。実は『伊勢集』にも、琴の貸借をめぐる歌の贈答が確認されるのである。該当するのは、三五〇番から三五三番にかけての歌群で、敦慶親王と伊勢との間で交わされたものとなる。

こ中務宮（＝敦慶親王）琴を借りたまひて、御かへしたまふとて

・（三五〇番）東琴春の調べを借りしかばかへし物とも思はざりけり

かへし

・（三五一番）ほどもなくかへすにまさる琴の音は人のとがめぬ音をやそふらん

・（三五二番）かへしても飽かぬ心をそへつれば常より声のまさるなるらん

かへし

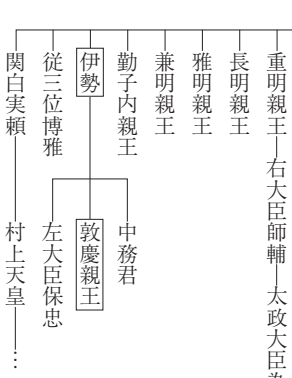
・（三五三番）みちよりやそふる心のかへりけむ知らぬ声なる琴もきこえぬ

敦慶親王が伊勢から琴を借り、その琴を返す時に詠んだ歌が三五〇番歌。歌意は、春の調べに調えられていたあづま琴（和琴）を借りたので、調律する必要も無く弾けたが、その琴をあなた（伊勢）に返さなければならないものとは思わなかった、となる。その敦慶親王の歌に対する伊勢の返歌が三五一番歌で、時を置かずに返してくれた琴の音色が以前よりも優れて聴こえるのは、あなた（敦慶親王）に気に入られて音色が加わったせいでしょうか、という意。ここで、この三五一番歌と、先の松風巻における明石の君の詠歌とを見比べてみたい。二首の歌はいずれも、相手の男から渡された「琴」に「音を添へる」というモチーフが詠み込まれており、同じ趣向の歌であると言えよう。

明石の君の返歌＝変らじと契りし琴をたのみにて松のひびきに音をそへしかな

伊勢三五一番歌＝ほどもなく返すにまさる琴の音は人のとがめぬ音をやそふらん

なお、琴の貸借をめぐって伊勢と歌を交わした敦慶親王という人物は、『河海抄』によれば、「光宮」と呼ばれ、「好色無双の美人」であったと伝えられており、光源氏のモデルの一人とされている。[注17] また、箏の琴の師子相承関係の系譜を表した『秦箏相承血脉』では、伊勢から箏の琴の伝授を受けた者として敦慶親王の名が見える。[注18]



ここで想起されてくるのが、明石巻で光源氏が帰京する際に、「さらば、形見にも忍ぶばかりの一ことをだに」（二六五頁）と、明石の君に箏の琴の演奏を望んでいた条である。これは見方によっては、明石の君に伝わる由緒ある箏の琴の奏法を、光源氏が学ぼうとしている構図として映ってくるのではないか。しかもその明石の君の由緒ある奏法というのは、明石入道の話によれば、「延喜（＝醍醐天皇）の御手」を伝えたものということになっており、[注19] これはちょうど、伊勢が醍醐天皇の奏法を相承していることと重なってくる。このように明石の君と伊勢との間には、琴の貸借というモチーフをめぐって符合してくる点が多く認められるのである。

四．桂への行程―母子離別の物語―

光源氏と明石の君の琴をめぐる再会は、明石の君が京の郊外である大堰へと転居してきたことで実現する。ここではその明石の君の

歩む行程を辿り、伊勢との関わりを確認していきたい。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。

（松風②三九七頁）

明石の地にとどまり続ける明石の君を都へ迎えようとした光源氏は、京内にある二条院の隣に新たに二条東院という邸宅を造営する。しかし明石の君は、上京するにあたってそこへは入居せず、母方の祖父中務宮の旧宅である大堰の山荘へと移り住む。

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後はかばかしう相継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼びとりて語らふ。…（略）…（最近になって光源氏が）造らせたまふ御堂は、大覚寺の南に当たりて、滝殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。これ（＝大堰の山荘）は川づらに、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。

（松風②三九八～四〇一頁）

明石の君の転居先である大堰の山荘は、大堰川の畔にある。近所には、最近になって光源氏が建造を始めた御堂があるという。この御堂は大覚寺の南に位置しているとあるところから、物語は嵯峨野一帯の地域を舞台として想定していると思われる。光源氏はこの明石の君のいる大堰の山荘を訪れるにあたり、紫の上に対して次のような口上を述べてゆく。

（光源氏）「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。とぶらはむと言ひし人（＝明石の君）さへ、かのわたり近く来ゐて待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御とぶらひすべければ、二三日ははべりなん」と聞こえたまふ。桂の院といふ所にはかにつくろはせたまふと聞くは、そこに据ゑたまへるにやと思すに心づきなければ、（紫の上）「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」と心ゆかぬ御気色なり。

（松風②四〇九頁）

これによると、桂に所用があり、ついでに嵯峨野の御堂にも立ち寄って来るとあって、あえて「大堰」という地名は出さずに旅程を伝えていることがわかる。それを聞いた紫の上は、「さては修繕中の桂の院に明石の君を迎えたのか」と推測する。この紫の上の推測は実際には外れているのだが、しかしその外れた推測が物語にこうして書き留められたことで、表現の次元では、明石の君が「大堰」という地名から外され、「桂」という地名に結び付けられていくという現象が起きることとなった。この「桂」という土地での出来事を、物語は次のように描いてゆく。

大御遊びはじまりて、いといまめかし。…（略）…月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人四五人ばかり連れて参れり。上にさぶらひけるを、御遊びありけるついでに、（冷泉帝）「今日は六日の御物忌あく日にて、かならず参りたまふべきを、いかなれば」と仰せられければ、ここ（＝桂の院）にかうとまらせたまひにけるよし聞こしめして、御消息あるなりけり。御使は蔵人弁なりけり。

（冷泉帝）「月のすむ川のをちなる里なれば桂のかげはのどけかるらむ

うらやましう」とあり。かしこまりきこえさせたまふ。上の御遊びよりも、なほ所がらのすごさ添へたる物の音をめでて、また酔ひ加はりぬ。ここには設けの物もさぶらはざりければ、大堰に、「わざとならぬ設けの物や」と言ひ遣はしたり。とりあへたるに従ひて参らせたり。衣櫃二荷にてあるを、御使の弁はとく帰り参れば、女の装束かづけたまふ。

（光源氏）久かたの光に近き名のみしてあさゆふ霧も晴れぬ山里

行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。（光源氏）「中に生ひたる」とうち誦じたまふついでに、…

（松風②四一九～四二〇頁）

大堰逗留の最終日、光源氏一行は桂の院に移動し、遊宴を催した。そこへ冷泉帝の消息が届く。「さぞかし桂で見る月の光はのどかであろう」と、桂での滞在を羨む内容であった。それに対して光源氏は、「桂とは名ばかりで、光（＝帝の威光）の届かぬ霧の山里です」と詠み、「中に生ひたる」という古歌の一節を口ずさむ。この光源氏の口ずさんだ古歌というのが、他ならぬ伊勢の歌であった。

これかれ（＝この男やあの男が）、とかく言へど、聞かで、宮仕へをのみしけるほどに、①時のみかど（＝宇多天皇）、めしつかひ給ひけり。よくぞ（他の男になびかず）まめやかなりける（＝宮仕えに専念した）と（伊勢自身が）おもふに、②をとこ宮生まれ給ひぬ。親なども、いみじうよろこびけり。つかうまつるみやすどころ（＝温子）も、后にゐたまひぬ。③宮（＝男皇子）を、桂といふ所に、おきたてまつりて、みづから（＝伊勢）は后の宮にさぶらふ。雨の降る日、うちながめて、（男皇子のことを）思ひやりたるを、宮（＝温子）、御覧じておほせらる

・（二一二番）月のうちに桂の人をおもふとや雨に涙の添ゐ（ひ）てふるらん

御かへし

・（二一三番）ひさかたの中に生い（ひ）たる里なれば光をのみぞたのむべらなる

これは、温子と伊勢との間で交わされた歌の贈答である。詞書によると、伊勢は温子に仕えるうちに、宇多天皇の「召人」[注20]として寵を受ける身となり（傍線部①）、やがて男皇子を生んだ（傍線部②）。その皇子は桂という所に置かれることになり、伊勢自身は皇子と離れて温子に仕え続けたという（傍線部③）。ちなみに、温子自身は宇多天皇との間に均子内親王を儲けたものの、皇子はなく、田坂憲二はこの温子と伊勢の関係が、紫の上と明石の君の関係に通じると説く。[注21] 伊勢にとって桂という地は自分の生んだ子との別離を想起させる時空としてあり、[注22]その別離の時空に明石の君もまた、儲けた姫君とともに引き込まれてきているのである。なお、伊勢自身も桂で暮らしていた時期があり、それを徴する歌が残されているので、顧みておこう。

みかど（＝宇多天皇）物におはしましけるついでに、桂なる家におはしまして、そこの花に書きつけさせ給ひける

・（二五〇番）梅の花香だに残らずなりにけりかこひてだにや惜しまざりつる

桂にはべりしころ、院のみかど（＝宇多上皇）のたまはせたりし

・（二三五番）あふほどと川を隔てて経るほどはたなばたつめもなにかことなる

二五〇番歌は、宇多天皇が行幸のついでに桂にある伊勢の家へやって来て詠んだ歌であり、二三五番歌は、その宇多が譲位後に詠んだ歌となる。いずれも桂で暮らす伊勢とその皇子を見舞った際のものと思われる。宇多天皇の子どもを身ごもった伊勢は、出産のために桂に家を用意され、そこで皇子を生み、しばらくは皇子とともに過ごしたのであろう。が、やがてその皇子を桂に残し、再び温子のもとで仕える生活に戻る。先に見た温子と伊勢の贈答はその頃のものと思われる。

ここで再び『源氏物語』の文脈に戻り、薄雲巻の冒頭に語られてくる明石の君の様子を見てみたい。

冬になりゆくままに、桂の住まひいとど心細さまさりて、（明石の君は）上の空なる心地のみしつつ明かし暮らすを、君（＝光源氏）も、「なほかくてはえ過ぐさじ。かの近き所（＝二条東院）に思ひ立ちね」とすすめたまへど、（明石の君は）つらきところ多く試みはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてか、などいふやうに思ひ乱れたり。（薄雲巻②四二七頁）

季節は冬へと移り、京の郊外で暮らす明石の君の心細さは募る一方である。光源氏も思い余り、自邸の隣に建てた二条東院への入居を勧めている。注目すべきは、そのような文脈の中で明石の君の所在地が「桂」と表現されている点である。厳密に言えば、明石の君は「大堰」で暮らしているのであり、「桂」に住んではいない。果たしてこの現象をどう解するべきか。ここではそれを、作品外コンテクストの拘束として捉えておきたい。これは、本来なら自律的に営まれているはずの物語（源氏物語）の文脈が、作品の外側にあるテクスト（伊勢集）の表現を参照し続けた結果、ついにはその文脈をも引き込んでしまうという現象を仮に〈拘束〉として捉えてみたものである。物語に即して言えば、明石の君の歩むべき行程が、伊勢の表現を参照し続けたことで、今やその伊勢の歩んだ足跡によって拘束されつつあるということになる。そして実際に、物語は伊勢の歩んだ足跡通りに、明石の君とその姫君との別離をこの薄雲巻で展開するのであった。

五．二条東院と伊勢の御息所の二重性

ここで、歌人伊勢の晩年の住居に関する伝承を見ておきたい。先に、明石の君の入居先として光源氏が二条東院を準備していたことについて触れたが、実はその二条東院で暮らすという階梯もまた、伊勢の履歴を踏襲するものである可能性が高いのである。次に掲げるのは、平安期の歌人源俊頼（一〇五五～一一二九年）の著とされ

る『俊頼髄脳』に見える話である。

能因法師は、歌をも、うがひして申し、草子などをも、手洗ひて取りもひろげける。ただ、うちするかと思ひけれど、讃岐の前司兼房と申しし人の、能因を、車のしりにのせて、ものへまかりけるに、二条と、東の洞院とは、伊勢が家にてありけるに、子日の小松のありけるを、さきを結びて植ゑたりけるが、生ひつきて、まことに大きなる、松にてありしが、木末の見えければ、車のしりより、まどひおりければ、兼房の君、心も得ず、「いかなる事ぞ」と尋ねければ、「この松の木は、高名の、伊勢が結び松には候はずや。それが松をば、いかでか、車にのりながらはすぎ侍らむ」といひて、はるかに歩みのきて、木松の隠るる程になりてこそ、車にはのれりける。[注23]

平安中期の歌人藤原兼房が、能因法師を牛車の後ろに乗せて出かけた時のこと。二条大路と東洞院大路の交わる所は、かつて伊勢の家があった場所で、先端を結んで植えておいた子の日の小松が根付き、今は大木に生長していた。その高名な伊勢の「結び松」の前を通り過ぎる際に、能因は下車の礼をもって敬意を表したとある。この逸話は、藤原清輔（一一〇四～一一七七年）が著した『袋草紙』にも収載されている。

能因、兼房の車の後に乗りて行くの間、二条東洞院にて俄かに下りて数町歩行す。兼房驚きてこれを問ふ。答へて云はく、「伊勢の御の家の跡なり。かの御の前栽の植松、今に侍り。いかでか乗り乍ら過ぐべけんや」と云々。松の木の末の見ゆるまで車に乗らずと云々。[注24]

『俊頼髄脳』とほぼ同じ内容であり、伊勢の家のあった場所を「二条東洞院」と記している。ちなみに、光源氏の二条院がある場所について、賢木巻では「二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条院の前なれば」（賢木②九四頁）とあり、[注25]この「洞院の大路」を東洞院と解すれば、[注26]伊勢の家と同じ区域ということになる。そしてその二条院の東側に、明石の君の入居する予定の二条東院は建てられたのであった。

伊勢が二条の辺りに暮らしていたであろうことは、次に掲げる『大和物語』十八段からもうかがえる。

故式部卿の宮（＝敦慶親王）、二条の御息所（＝伊勢）に絶えたまひて、またの年の正月の七日の日、若菜奉りたまうけるに、

（伊勢）ふるさとと荒れにし宿の草の葉も君がためとぞまづはつみける

とありけり。

（新編日本古典文学全集・二六六頁）

これは、敦慶親王と伊勢の仲が途絶えた後、その翌年の正月七日（子の日）に伊勢が親王へ若菜を献上した際に歌を詠み添えたというエピソードである。その歌は、「もはや古びた里となり、荒れてしまった家の草の葉ですが、何よりもまず、あなたのためにと摘みました」というものであった。[注27]ここで詠まれた「ふるさと」は、伊勢の呼称が「二条の御息所」とあることから二条の地にあったと想定してよかろう。伊勢が敦慶親王と交際を始めたのは温子崩御後のことであり、その頃より伊勢は二条の地で暮らすようになっていたと思われる。[注28]

この伊勢はまた、「伊勢の御息所」とも呼ばれている。

かかることどものむかしありけるを、絵にみな書きて、故后の

宮（＝温子）に人の奉りたりければ、これ（＝生田川伝説）がうへを、みな人々（＝温子のサロンの人々）この人（＝絵に描かれた人物たち）にかはりてよみける。伊勢の御息所（＝伊勢）、男の心にて、

（伊勢）かげとのみ水のしたにてあひ見れど魂なきからはかひなかりけり　（新編全集・三七一頁）

これは、『大和物語』一四七段の一節である。当段は三つに分かれており、第一段は生田川の処女塚伝説を語る部分。第二段はその伝説の屏風絵を題材にして温子に仕える宮廷女房たちが歌を詠むという部分。第三段は処女塚伝説の後日談を語る部分となる。右に引用したのはその第二段に当たる箇所で、伊勢が屏風絵の中の登場人物である男に成り代わって心中を歌に詠んだ条である。この時すでに、伊勢は宇多天皇の皇子を生んだ身であったのだろうか、「御息所」の呼称を得ている。これは温子在世中の歌語りであり、伊勢はまだ二条の地で暮らしておらず、「二条」ではなく「伊勢」の「御息所」と呼ばれている。

伊勢の御息所（＝伊勢）生み奉りたりける親王のなくなりにけるが、描き置きたりける絵を藤壺より麗景殿の女御の方に遣はしたりければ、この絵返すとて　麗景殿宮の君

なき人の形見と思（おもふ）にあやしきはゑ（絵）見ても袖の濡るゝなりけり　（岩波新日本文学大系）

これは、『拾遺和歌集』巻九雑下・五四二番歌で、やはり伊勢のことを「伊勢の御息所」と称している事例である。詞書に見える「藤壺」は村上天皇の中宮安子、「麗景殿の女御」は村上天皇の女御荘子女王のこと。伊勢の生んだ男皇子は五歳（群書類従本・歌仙家集本では八歳）で亡くなったのだが、その皇子が生前に描いた絵が宮中に残されていて、村上朝の後宮で貸借されつつ、鑑賞されていたことがわかる。

さて、これらに見える「伊勢の御息所」という呼称だが、これこそは、本論の冒頭で問題の所在とした明石巻に見える「伊勢の御息所」と考えることはできないであろうか。つまり、明石の君が似ているとされたのは、伊勢に下っている最中の六条御息所という作中人物を経由しつつも、その焦点の結ばれる先は作品外のコンテクストとして敷設された歌人伊勢であったのではないかという解釈である。もしこの仮説が認められるならば、明石の君とは、その初めて登場してくる場面において既に歌人伊勢との一致を物語によって刻み付けられていたということになる。

結

『源氏物語』の明石巻には、光源氏が明石の君と出会い、結ばれる模様が描かれている。二人が初めて対面する場面で、明石の君は「明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ」という歌を詠むが、その様子を物語は「伊勢の御息所」によく似ていると語る。この「伊勢の御息所」について、通行の解釈はいずれも六条御息所を指すとするが、両者の相似は人柄や風貌などではなく、そこに用いられた表現であると推測される。すなわち、六条御息所が下向先の伊勢から光源氏に送った手紙の中に、「明けぬ夜の心まどひかとなん」（須磨巻）という文言があり、明石の君の歌句と一致するのである。

本論ではさらに、この「明けぬ夜」という表現の典拠が作品の外側に求められる点に注目した。その典拠とは、平安中期の歌人伊勢の詠んだ「逢ふことの明けぬ夜ながら明けぬれば我こそ帰れ心やはゆく」という歌である。この歌を念頭に置いて問題の所在となる明石の君の詠歌場面を顧みた場合、「伊勢の御息所」に似ているという叙述は、作品内の六条御息所を経由しつつも、作品外の歌人伊勢との類似を意味してくる可能性が出てくる。実際に物語は、明石の君を描いてゆく過程で歌人伊勢の音楽（琴）にまつわるエピソードを次々に引用していくのであった。そして、そのような引用を繰り返した結果、明石の君の歩むべき行程が、あたかも歌人伊勢の歩んだ足跡に拘束されるかのような様相を呈することになる。

伊勢の足跡がとりわけ拘束力を発揮するのは、宇多天皇の召人として皇子を生みつつも、その皇子との別離を余儀なくされてしまうという展開である。伊勢の皇子出産前後の履歴は桂という地をめぐって刻まれているが、明石の君とその娘が一時的に大堰で暮らし、その地が「桂」と表現されていく過程で別離を経験するという物語の運びはそれを踏襲するものであろう。また、伊勢の人生は二条東院に帰着することになるが、明石の君に用意された居所もまた、二条東院であった。しかし明石の君は、ついにその二条東院への入居を拒み続け、最終的には六条院の住人となる。その選択は、あたかも伊勢の人生―召人としての人生―を拒む生き方として映ってはこないか。ここにおいて明石の君の生は歌人伊勢のくびきから解き放たれ、物語に固有のものとして自立することになると言えよう。

注

1 『源氏物語』本文の引用は小学館刊新編日本古典文学全集に拠り、巻名・冊数・頁数を記した。以下同様。

2 坂本和子「光源氏の系譜」（『国学院雑誌』一九七五年十二月、日本文学研究資料叢書『源氏物語Ⅳ』有精堂、一九八二年に採録）

3 藤井貞和「明石の君　うたの挫折」（『源氏物語入門』講談社学術文庫、一九九六年、初出一九七九年）

4 小沢恵右「六条御息所と明石上―「いとようおぼえたり」という視点―」（『国文学攷』一九七八年三月）

5 久富木原玲「もうひとつのゆかり―桐壺更衣・六条御息所から明石の君・明石の中宮へ―」（『源氏物語　歌と呪性』若草書房、一九九七年）

6 安藤徹「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所に―物語社会を紡ぐ人間関係」（『国文学』二〇〇〇年七月）

7 鎌田清栄「明石の女と伊勢の御息所」（広島平安文学研究会『古代中世国文学』四、一九八四年八月）。なお、鎌田の見解とは反対に、笹部晃子は、明石の君と六条御息所の人物造形を結ぶものとして斎宮女御（徽子女王）の影響を説いている（「明石君と六条御息所―斎宮女御徽子との関わりから」『中央大学国文』四七、二〇〇四年三月）。

8 注6安藤論文に「自由間接言説」であるとの指摘がある。なお、塩崎真理子は、この叙述を光源氏の意識に関わるものとして捉え、両者の類似は光源氏の意識の中で正妻格にある女性（葵の上、紫の上）と相対的に存在している点に求められるとする

（「明石の君と六条御息所の類似―源氏の心情から―」『駒沢大学大学院国文学会　論輯』三三、二〇〇五年三月）。

9　岩波新大系『源氏物語索引』による。

10　宗雪修三「「椎本」巻における和歌言語の方法」（『名古屋大学国語国文学』一九七八年十二月）

11　竹内正彦「明石君の「けはひ」―「明石」巻における「伊勢の御息所」をめぐって―」（『源氏物語発生史論―明石一族物語の地平―』新典社、二〇〇七年）

12　伊井春樹編『源氏物語引歌索引』（笠間書院、一九七七年九月）

13　「あけぬよ　あふことの明ぬ夜なからあけぬれは我こそかへれこころやはゆく」（『正宗敦夫収集善本叢書第Ⅰ期　第二巻　花屋抄』武蔵野書院、二〇一〇年九月）

14　『伊勢集』本文は、新日本古典文学大系『平安私家集』（岩波書店、一九九四年）に拠る。以下同様。

15　関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』四三六頁（風間書房、一九九六年）

16　伊勢の出生年など、諸説分かれるところもあるが、ここでは注15書所収の「伊勢年譜」に拠った。

17　『河海抄』（一三六八年）巻一・桐壺（玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』角川書店、一九六八年）に「ひかるきみときこゆ　亭子院（＝宇多天皇）第四皇子敦慶親王号光宮好色無双之美人也」とある。

18　『秦筝相承血脉』（『群書類従』第十九輯「管絃部九」所収）

19　（明石入道）「…なにがし、延喜（＝醍醐天皇）の御手より弾き伝へること三代になんなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは棄て忘れはべりぬるを、ものの切にいぶせきをりをりは掻き鳴らしはべりしを、あやしうまねぶ者（＝明石の君）のはべるこそ、自然にかの前大王の御手に通ひてはべれ。…」（明石巻②二四二頁）

20　「召人」とは、「主人と主従関係にある女房で、身分の低さから正式な結婚を経ていないが主人と男女の関係にあることをその属性とする」者のことである（百瀬明美「召人」『源氏物語事典』大和書房、二〇〇二年）。

21　田坂憲二「源氏物語の『桂の院』について」（『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年）

22　なお、伊勢の詠んだ二三番歌は、『古今集』巻十八雑下にも九六八番として見え、「桂に侍りける時に、七条の中宮のとはせ給へりける御返事に奉れりける」（新編全集本）という詞書を持つ。これに従えば、詠歌時に伊勢は皇子とともに桂の地にいたことになる。

23　新編日本古典文学全集『歌論集』二三六～七頁（小学館、二〇〇二年）

24　新日本古典文学大系『袋草紙』八九頁（岩波書店、一九九五年）

25　河内本では、「二条より洞院のおほちわたり給ふほど院のかたはらなれは」（『源氏物語大成』巻一）とある。

26　増田繁夫「『東院大路』考―光源氏の二条院―」（『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館、二〇〇二年）の考証による。

27　今井源衛『大和物語評釈』上巻（笠間書院、一九九九年）によって、『大和物語』十八段と次に掲げる『伊勢集』一四八番歌との類似が指摘されている。

　里にはべりしをり、花のいとおもしろきを、式部卿にたて

28

まつるとて

ふるさとのあれてなりたる秋の野に花見がてらに来る人もがな

なお、『大和物語』十八段の人物については、「故式部卿の宮」を宇多天皇第九皇子敦実親王とする説（朝日古典全書）や、「二条の御息所」を藤原定方の娘能子と解する説（北村季吟『大和物語拾穂抄』）など、諸説の見られるところであるが、本論では森本茂『大和物語全釈』（大学堂書店、一九九三年）の説に従って、敦慶親王と伊勢の話と解しておく。

（もりの・まさひろ）